

# 学生における障害者の理解を広げる取り組み

## —美作福祉部隊リカイヒロメタインジャーの活動を通して—

薬師寺明子

Akiko YAKUSHIJI

本活動は学生が主体的に地域の人々に障害に対する理解を広げるために、これまでの活動報告及び今後の課題について検討する。

### 1. はじめに

2002年12月に閣議決定された障害者基本計画の基本的な方針の中で「21世紀にわが国が目指すべき社会は、障害の有無に関わらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支えあう共生社会とする必要がある」とある。この「共生社会」とは、障害者は、社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下に社会活動に参加・参画し、社会の一員として責任を分かち合う社会の実現を目指すものである。<sup>1)</sup> 「共生社会」の実現には障害者や障害に対する理解が必要不可欠である。このように、地域で自分らしく生活することは人として当然の権利であり、障害の有無に関わらず妨げられることではない。しかし、障害のある人や障害に対する無理解から、差別・偏見が生じている。

本活動は学生が主体となり、地域の人々に障害のある人や障害に対する理解を広げるために、「障害者」や「障害」を楽しく理解できるよう、知的障害や自閉症といった障害の特徴をふまえた劇や疑似体験を用いて公演を行っている。2009年度の活動について報告する。

### 2. 活動の経緯

筆者が担当した卒業生の卒業研究、「自閉症児を持つ親が抱える「生活のしづらさ」—親の思いと地域住民の意識から—<sup>2)</sup>をゼミ生(当時3年生)が読み「学生としてできること」というテーマで議論した。議論の結果、学生全員で取り組み、地域住民が受け入れやすく、容易に理解できること、マスコミも活用できるものというような実践していく上で必要なポイントが挙がり、結果として「劇」を用いて公演していくことに決定した。そして地域の人々に障害のある人や障害に対する理解を広げることを目的として、「美作福祉部隊リカイヒロメタインジャー」として啓発活動を行うこととなった。

### 3. 活動内容

#### 1) 学習

学生メンバーがグループに分かれ、障害や障害者について調べ、発表するという形で行った勉強会やボランティア活動、学外の講演会等を通して学んだ。また、当事者の気持ちを直接聞く機会を設け、当事者の置かれている現状や気持ちを伺った。このような学習を通して学生メンバーの知識だけでなく、想いも育み、公演の内容を充実させていった。

#### 2) 公演の流れ

##### (1) オープニング

既存の歌謡曲の歌詞をアレンジして「リカイヒロメタインジャー」のテーマソング「ええがん」の中で、活動のモットーである「障害があってもええがん」という想いを歌や踊りを通して表現する。

##### (2) 劇「ええがん」

主人公が地域で生活する中で出会う「不思議な人々」との関わりを通して、天使が主人公に対してレクチャーを行う形で障害やICFについてわかりやすく説明する。その後、悪魔が登場し、「気持ち悪い、怖い」等の納得できなかった部分を指摘するが、それらに対して天使が一つひとつ応えていき、主人公が障害について少しずつ理解をしていくという内容。

なお、参加者が主人公の立場を実感できるように参加者の年代や立場を考慮したり、身近な場面で障害者と出会う場面の設定等の工夫したシナリオを作成している。例えば高齢者や中高年向けのシナリオでは、主婦である主人公がスーパーで障害者と出会い、高校生向けのシナリオでは学生である主人公が登校途中や学校で障害者と出会いストーリーが展開し

ていく。



写真1:劇「ええがん」の場面

### (3)「知的障害者」疑似体験

#### ①じゃけじゃけ共和国に入学してみよう

参加者の一人にゲストとして参加してもらい、「じゃけじゃけ(岡山県の方言)」としか喋らない人との関わりを通して、言葉や意思が「伝わらない」ことの大変さを体験する。そして、知的障害や自閉症の人と関わる時に大切なポイントとコミュニケーション方法について理解できるよう説明する。

#### ②ペットボトルをのぞいてみよう

加工したペットボトルを用いて、自閉症の障害特性であるシングルフォーカスを体験し、ゲームやわかりやすい例えを用いて、シングルフォーカスについて理解してもらうことを目的としている。



写真2:「ペットボトルをのぞいてみよう」の場面

#### ③折り紙を折ってみよう

知的障害のある人の中には、手先の細かい動きが苦手である人もおり、それを軍手を二重にはめて折鶴を折るという体

験を通して理解すると共に、「けなす」「褒める」という声かけを行うことによって、支援される側の心理状況も体感する。

以上の(1)~(3)の内容を約90分間で行う。(3)の疑似体験は先駆的な活動を行っている二つの団体<sup>(3)(4)</sup>での実践を参考にして工夫を加えた。(2)劇「ええがん」については完全オリジナルである。



写真3:「軍手で折り紙を折ってみよう」の場面

### 3)広報活動

本活動は基本的に依頼を受け、公演しているため、地域住民に広く知ってもらうことからが活動である。広報ポスターを作成し、公共施設等への掲示、福祉フォーラム等での配布を行った。また、公演の様子を新聞やテレビのニュース、インターネットの新聞のホームページで取り上げってもらうこともあった。これらの広報活動により、多くの依頼を受けることができた。ロゴ入りのオリジナルのTシャツも多くの人々の印象に残り、人伝えでの広報に効果があった。



写真4:広報ポスター(A4 両面印刷)



写真5:(左) 学生向けの広報ポスター (右) Tシャツ

#### 4) 対象者に応じたシナリオ

活動を続けて行くうちに様々な団体から依頼を受けるようになった。以前より、対象者に合わせた表現の工夫や劇のシナリオを作成していたが、さらに内容の幅が大きくなっている。主な劇のシナリオは以下のとおりである。

- ・幼児向け
- ・小学生低学年向け
- ・小学生高学年向け
- ・中学生向け
- ・高校生向け
- ・大学生向け
- ・幼稚園・保育所の保護者向け
- ・大人向け
- ・年配の方向け
- ・当事者の親向け 等々

また、障害の内容に特化したものへのニーズもあり、「ダウン症について」、「精神障害について」等のシナリオもある。

#### 5) フィードバック

公演内容に関する感想等を記入するアンケートを行い、フィードバックに活かしている。主なアンケートの結果は、高齢者は「若い人たちが必死に伝えている様子を見て感動した」という意見が多くあり、高校生は、「障害者も私たちと同じ」等が多くあった。専門職は「新たな事に気づかされる公演だった」、当事者の親は、「学生の活動をみて将来への期待が持てた」という意見が多くあった。全体的に自分自身が持っていた偏見に気づいたという意見が多かった。

これらのアンケート結果や公演中の参加者の反応、準備や練習過程を踏まえたメンバー個々の反省を挙げ、公演ごとにフィードバックを行っている。このフィードバックは、活動の向上や公演ごとに伝えるべき、理解してもらいべき点を全員で再確認するだけでなく、メンバーの活動意欲を増進する場ともなっている。

#### 6) 活動歴

2009年度の主な公演活動は、小学校や高校等の教育機関での公演が多かった。年間22回、約1700名に対し公演を行った。(2009年度活動内容参照)

### 4. 活動内容の向上を目指して

#### 1) 学生の成長

活動を通して、学生メンバー個々の障害理解、意識の変化や学習意欲の向上が見られた。そして、当初ゼミ活動として始まったものだったが、現在は学年やゼミを超えて有志が集まり、今では30名を超えて活動している。「理解を広めよう」という同じ目的に向かい、苦難や喜びを共有することで「仲間」から「同志」となり、グループ全体の成長、学生メンバー個々の成長へと発展している。こうした個々の想いが参加者に伝わることで、公演がより魅力的になっていくのではないだろうか。



写真6:先輩から後輩へ多くの学生が活動

### 5. 今後の課題

現在、小学校からも公演依頼が来ており、参加者の年齢層や立場の幅が徐々に広がりつつある。また、精神障害や発達障害、ダウン症等という障害種別のニーズや、「障害」という言葉を用いない等、内容の幅も広がってきている。年代に応じて表現を工夫すること、障害特性に配慮し伝えること、理解してもらう内容を明確にし、シナリオや構成を今後より一層工夫することが課題として挙げられる。

そして、これまでの活動や公演毎のフィードバック、地域住民に対する意識調査(2008年に当時の4年生が実施)の結果から今後の活動における留意点が明らかになった。知的障害者については、コミュニケーション方法について具体的に伝えていくこと、精神障害者については、誤解や偏見があるのでシナリオの工夫が必要等の課題が挙げられた。

本活動を通し、障害のある人が地域でいきいきと暮らしていくためには地域住民の理解が必要であることを改めて実感させられた。公演がきっかけとなり、地域住民が障害について

考え、理解が少しでも広がっていくことを望んでいる。今後も学習を深め、活動を続けられるよう、学生の「想い」を育て、それを継承させていくことが大きな課題である。個性という「違い」を理解し、お互いを尊ぶことを伝え、障害の有無に関わらず、人々がいきいきと暮らすことの出来る地域社会になることを目指し、本活動を積極的に実践していきたい。

<参考文献>

- 1)『社会福祉士養成講座3障害者福祉論』中央法規出版、2008.
- 2)嘉陽真由美「自閉症児を持つ親が抱える「生活のしづらさ」  
—親の思いと地域住民の意識から—」
- 3)座間市「手をつなぐ育成会」
- 3)P&A 大阪「アドボカシー・インストラクター養成講座」